

文章

芥川龍之介

青空文庫

「堀川さん。弔辞ちようじを一つ作つてくれませんか？ 土曜日に本多

少佐の葬式がある、——その時に校長の読まれるのですが、……」

藤田大佐は食堂を出しなにかう保吉やすきちへ話しかけた。堀川保吉

はこの学校の生徒に英吉利語イギリスの訳読を教えている。が、授業の合あ

い間まには弔辞を作つたり、教科書を編あんだり、御前講演ごぜんの添削てんさく

をしたり、外国の新聞記事を翻訳ほんやくしたり、——そう云うことも

時々はやらなければならぬ。そう云うことをまた云いつけるのは

いつもこの藤田大佐である。大佐はやつと四十くらいであろう。

色の浅黒い、肉の落ちた、神経質らしい顔をしている。保吉は大

佐よりも一足ひとあしあとに薄暗い廊下ろうかを歩みながら、思わず「おや」

と云う声を出した。

「本多少佐は死なれたんですか？」

大佐も「おや」と云うように保吉の顔をふり返った。保吉はきのうずる休みをしたため、本多少佐の頓死とんしを伝えた通告書を見ずにしまったのである。

「きのうの朝歿なくなられたです。脳溢血のういつけつだと云うことですが、……じゃ金曜日までに作って来て下さい。ちようどあさつての朝までにですね。」

「ええ、作ることとは作りますが、……」

悟りさとの早い藤田大佐はたちまち保吉の先まわりをした。

「弔辞しよを作られる参考には、後ほど履歴書りれきしよをおとどけしましよ

う。」

「しかしどう云う人だったでしょう？　僕はただ本多少佐の顔だけ見覚えていくくらいなんですが、……」

「さあ、兄弟思いの人だったですね。それから……それからいともクラス・ヘッドだった人です。あとはどうか名筆を揮^{ふる}って置いて下さい。」

二人はもう黄色^{きいろ}に塗^ぬった科長室の扉^{ドア}の前に立っていた。藤田大佐は科長と呼ばれる副校長の役をしているのである。保吉はやむを得ず弔辞^{しせいえいご}に関する芸術的良心を抛^{ほうてき}擲した。

「資性^{しせいえいご}穎悟^{けいてい}と兄弟^{けいてい}に友^{ゆう}にですね。じゃどうにかこじつけましよう。」

「どうかよろしく願います。」

大佐に別れた保吉は喫煙室へ顔を出さずに、誰も人のいない教官室へ帰った。十一月の日の光はちようど窓を右にした保吉の机を照らしている。彼はその前へ腰をおろし、一本のバットへ火を移した。弔辞はもう今日までに二つばかり作っている。最初の弔辞はもうちようえん盲腸炎しげのしょういになった重野少尉のために書いたものだった。当時学校へ来たばかりの彼は重野少尉とはどう云う人か、顔さえはつきりした記憶はなかった。しかし弔辞の処女作には多少の興味を持っていたから、「悠々たるかな、はくうん白雲」などととうそうはつ唐宋八かぶん家文かぶんじみた文章をそう草した。その次のは不慮ふりよの溺死できしを遂げた木村きむら大尉たいいのために書いたものだった。これも木村大尉その人とは毎日

同じ避暑地からこの学校の所在地へ汽車の往復を共にしていたため、素直に哀悼^{あいとう}の情を表することが出来た。が、今度の本多少佐はただ食堂へ出る度に、禿^はげ鷹^{たか}に似た顔を見かけただけである。のみならず弔辞を作ることに興味も何も持っていない。云わば現在の堀川保吉は注文を受けた葬儀社である。何月何日の何時までに竜^{りゅう}燈^{とう}や造花を持って来いと云われた精神生活上の葬儀社である。——保吉はバツトを啣^{くわ}えたまま、だんだん憂鬱^{ゆううつ}になりはじめた。……

「堀川教官。」

保吉は夢からさめたように、机の側に立った田中中尉を見上げた。田中中尉は口髭^{くちひげ}の短い、まろまろと顴^{あご}の二重になった、愛^あ

いきよう
敬のある顔の持主である。

「これは本多少佐の履歴書だそうです。科長から今堀川教官へお渡ししてくれと云うことでしたから。」

田中中尉は机の上へ罫紙けいしを何枚も綴とじたのを出した。保吉は「はあ」と答えたぎり、茫然と罫紙へ目を落した。罫紙には叙任じょにんの年月ばかり細かい楷書かいしよを並べている。これはただの履歴書ではない。文官と云わず武官と云わず、あらゆる天下の官吏なるものの一生を暗示する象徴である。……

「それから一つ伺いたい言葉があるのですが、——いや、海上用語じゃありません。小説の中にあつた言葉なんです。」

中尉の出した紙切れには何か横文字の言葉が一つ、青鉛筆あとおの痕

を残している。Masochism——保吉は思わず紙切れから、いつも頬ほおに赤みのさした中尉の童顔へ目を移した。

「これですか？ このマソヒズムと云う……」

「ええ、どうも普通の英和辞書には出て居らんように思いますが。」

保吉は浮かない顔をしたまま、マソヒズムの意味を説明した。

「いやあ、そう云うことですか！」

田中中尉は不相あいかわらず変晴ればれた微笑びしょうを浮かべている。こう

云う自足じそくした微笑いらいだくらい、苛いらだ立たしい気もちを煽あおるものはない。

殊に現在の保吉は実際この幸福な中尉の顔へクラフト・エビングの全語彙ごいを叩きつけてやりたい誘惑さえ感じた。

「この言葉の起源になった、——ええと、マゾフと云いましたな。その人の小説は巧うまいんですか？」

「まあ、ことごとく愚作ですね。」

「しかしマゾフと云う人とはとにかく興味のある人格なんですな？」
「マゾフですか？ マゾフと云うやつは莫迦ばかですよ。何しろ政府は国防計画よりも私娼保護ししょうほごに金を出せと熱心に主張したそうですからね。」

マゾフの愚を知った田中中尉はやつと保吉を解放した。もっともマゾフは国防計画よりも私娼保護を重んじたかどうか、その辺は甚だはつきりしない。多分はやはり国防計画にも相当の敬意を払っていたであろう。しかしそれをそう云わなければ、この楽天

家の中尉の頭に変態へんたいせいよく性慾せいよくの莫迦ばか莫迦ばかしい所以ゆえんを刻きざみつけてしまふことは不可能だからである。……

保吉は一人になった後のち、もう一本バットに火をつけながら、ぶらぶら室内を歩みはじめた。彼の英吉利語イギリスを教えていることは前にも書いた通りである。が、それは本職ではない。少くとも本職とは信じていない。彼はとにかく創作を一生の事業と思つてゐる。現に教師になつてからも、たいていふたつき二月に一篇ずつは短い小説を發表して來た。その一つ、——サン・クリストフの伝説けいちを慶けい長ようばん版ばんの伊曾保物語いそほものがたり風ふうにちようど半分ばかり書き直したものは今月のある雑誌に載せられている。来月はまた同じ雑誌に残りの半分を書かなければならぬ。今月ももう七日なぬかとすると、来月号

の締切り日は——ちようじ弔辞などを書いている場合ではない。昼夜兼行に勉強しても、元来仕事にてま手間のかかる彼には出来上るかどうか疑問である。保吉はいよいよ弔辞に対する忌いまいましさをを感じ出した。

この時大きい柱時計の静かに十二時半を報じたのは云わばニュウトンの足もとへ林檎りんごの落ちたのも同じことである。保吉の授業の始まるまではもう三十分待たなければならぬ。その間あいだに弔辞を書いてしまえば、何も苦しい仕事の合い間に「悲しいかな」を考えずとも好い。もつともたつた三十分の間に資性しせい穎悟えいごにして兄けいて弟いに友なる本多少佐を追悼ついでうするのは多少の困難を伴っている。が、そんな困難に辟易へきえきするようでは、上は柿本人麻呂かきのもとひとまろから下しも

は武者小路実篤むしやのこうじさねあつに至る語彙ごいの豊富を誇っていたのもことごとく空威張りからいばになつてしまふ。保吉はたちまち机に向うと、インク壺へペンを突つこむが早い、試験用紙のフウルス・カップへ一気に弔辞を書きはじめた。

×

×

×

本多少佐の葬式の日は少しも懸かけ価ねのない秋あき日和びよりだった。保吉はフロック・コオトにシルク・ハットをかぶり、十二三人の文官教官と葬列のあとについて行つた。その中うちにふと振り返ると、

校長の佐佐木中將を始め、武官では藤田大佐だの、文官では栗野あわの教官だのは彼よりも後ろうしに歩いている。彼は大いに恐縮したから、直後ろすぐにいた藤田大佐へ「どうかお先へ」と会釈えしやくをした。が、大佐は「いや」と云つたぎり、妙ににやにや笑っている。すると校長と話していた、口髭くちひげの短い栗野教官はやはり微笑を浮かべながら、常談じょうだんとも真面目まじめともつかないようにこう保吉へ注意をした。

「堀川君。海軍の礼式じゃね、高位高官のものほどあとに下るさがんだから、君はとうてい藤田さんの後塵こうじんなどは拝せないですよ。」

保吉はもう一度恐縮した。なるほどそう云われて見れば、あの愛敬あいきようのある田中中尉などはずっと前の列に加わっている。保

そうそう おおまた

吉は 々 大股に中尉の側へ歩み寄った。中尉はきょうも葬式よりは婚礼の供にでも立ったように欣々きんきんと保吉へ話しかけた。

「好い天気ですなあ。……あなたは今葬列に加わられたんですか？」

「いや、ずっと後ろうしろにいたんです。」

保吉はさっきの顛末てんまつを話した。中尉は勿論葬式の威厳きげんを傷けるかと思うほど笑い出した。

「始めてですか、葬式に来られたのは？」

「いや、重野少尉の時にも、木村大尉の時にも出て来たはずですよ。」

「そう云う時にはどうされたですか？」

「勿論校長や科長よりもずっとあとについていたんでしよう。」

「そりやどうも、——大將格になった訣わけですな。」

葬列はもう寺に近い場末ばすえの町にはいつている。保吉は中尉と話

しながら、葬式を見に出た人々にも目をやることを忘れなかった。

この町の人々は子供の時から無数の葬式を見ているため、葬式の

費用を見積みつることに異常の才能を生じている。現に夏休みの一日

前に数学を教える桐山きりやま教官のお父さんの葬列の通った時にも、

ある家の軒下のきした たたずに佇んだ甚平じんべい一つの老人などは洩団扇しぶうちわを額ひたいへ

かざしたまま、「ははあ、十五円の葬とむらいだな」と云った。きよう

も、——きようは生憎あいにくあの時のように誰もその才能を発揮しな

い。が、大本教おおもときようの神主かんぬしが一人、彼自身の子供らしい白しらつ子こ

を肩かたぐるま車くるまにしていたのは今日こんにち思い出しても奇観である。保吉はいつかこの町の人々を「葬式」とか何とか云う短篇の中に書いて見たいと思ったりした。

「今月は何とかほろ上しょうにん人と云う小説をお書きですな。」

愛想の好い田中中尉はしつきりなしに舌をそよがせている。

「あの批評が出ていましたぜ。けさの時事じじ、——いや、読売よみうりでした。後のちほど御覧に入れましょう。外套がいとうのポケットにはいっていますから。」

「いや、それには及びません。」

「あなたは批評をやられんようですな。わたしはまた批評だけは書いて見たいと思っっているんです。例えばシェクスピアのハム

レットですね。あのハムレットの性格などは……」

保吉はたちまち大悟した。^{たいご}天下に批評家の充満しているのは必ずしも偶然ではなかったのである。

葬列はとうとう寺の門へはいった。寺は後ろの松林の間に^な屈んだ海を見下^{みおろ}している。ふだんは定めし閑静であろう。が、今は門の中は葬列の先に立つて来た学校の生徒に埋^{うず}められている。保吉は庫裡^{くり}の玄関に新しいエナメル^{くつ}の靴を脱^ぬぎ、日当りの好^いい長^{なが}廊下^かを畳ばかり新しい会葬者席へ通った。

会葬者席の向う側は親族席になっている。そこの上座に坐っているのは本多少佐のお父さんであろう。やはり禿^はげ鷹^{たか}に似た顔はすっかり頭の白いだけに、令息よりも一層慄^{ひよう}慄^{かん}である。その

次に坐っている大学生は勿論弟に違いあるまい。三番目のは妹にしては器量きりようの好過ぎる娘さんである。四番目のは——とにかく四番目以後の人にはこれと云う特色もなかったらしい。こちら側がわの会葬者席にはまず校長が坐っている。その次には科長が坐っている。保吉はちょうど科長のま後ろ、——会葬者席の二列目にズボンの尻しりを据すえることにした。と云つても科長や校長のようにちやんと膝ひざを揃ひらえたのではない。容易しびに痺れの切れないように大胡坐おおあをかいてしまったのである。

読経どきようは直すぐにはじまった。保吉は新内しんないを愛するように諸宗の読経をも愛している。が、東京乃至東京近在ないしの寺は不幸にも読経の上にさえたいていは墮落だらくを示しているらしい。昔は金峯山きんぷせんの

蔵王ざおうをはじめ、熊野くまのの権現ごんげん、住吉すみよしの明神みょうじんなども道明阿闍梨ぎやうりの読経よみぎやうを聴ききに法輪寺ほうりんじの庭へ集まつたそうである。しかしそう云う微妙音びみょうおんはアメリカ文明の渡来と共に、永久に穢土えどをあとにしてしまった。今も四人の所化しよけは勿論、近眼鏡きんがんきやうをかけた住職は国定教科書を諳誦あんしようするように提婆品だいばほんか何かを読み上げてゐる。

その中うちに読経よきぎやうの切れ目へ来ると、校長の佐佐木中将はおもむろに少佐の寢棺ねがんの前へ進んだ。白い綸子りんすに蔽おおわれた棺かんはちやうど須弥壇しゆみだんを正面にして本堂の入り口に安置してある。そのまた棺の前の机には造花の蓮はすの花の仄ほのめいたり、蠟燭ろうそくの炎ほのおの靡なびいたりする中に勲章の箱なども飾つてある。校長は棺に一礼した後のち、左

の手に携たずさえていた大奉書おおほうしょの弔辞ちようじを繰りひろげた。弔辞は勿論
 二三日まえ前に保吉の書いた「名文」である。「名文」は格別恥はずる
 所はない。そんな神経はどうの昔、古い革砥かわとのように擦すり減らさ
 れている。ただこの葬式の喜劇の中に彼自身も弔辞の作者と云う
 ひとひとやく一役を振られていることは、——と云うよりもむしろそう云う
 事実をあからさまに見せつけられることはとにかく余り愉快では
 ない。保吉は校長の咳せき払いと同時に、思わず膝の上へ目を伏せ
 てしまった。

校長は静かに読みはじめた。声はやや錆さびを帯びた底にほとん
 ど筆舌を超ちようえつ越した哀切の情をこもらせている。とうてい他人
 の作った弔辞を読み上げているなどとは思われない。保吉はひそ

かに校長の俳優的才能に敬服した。本堂はもとよりひっそりしている。身動きさえ滅多に^{めった}するものはない。校長はいよいよ沈痛に「君、資性^{しせい}穎悟^{えいご}兄弟^{けいてい}に友^{ゆう}に」と読みつづけた。すると突然親族席に誰かくすすす笑い出したものがある。のみならずその笑い声はだんだん声^{こわだか}高になつて来るらしい。保吉は内心ぎよつとしながら、藤田大佐の肩越しに向う側の人々を物^{ぶつ}色^{しよく}した。と同時に場所柄^{がら}を失した笑い声だと思つたものは泣き声だったことを発見した。

声の主は妹^{めし}である。旧式の束髪^{そくはつ}を俯向^{うつむ}けたかげに絹の手巾^{はんけち}を顔に当てた器量^{きりよう}好しの娘さんである。そればかりではない、弟も——武骨^{ぶこつ}そうに見えた大学生もやはり涙をすすり上げている。

と思うと老人もしつきりなしに鼻紙を出してはしめやかに鼻をか
 みつづけている。保吉はこう云う光景の前にまず何よりも驚きを
 感じた。それからまんまと看客^{かんかく}を泣かせた悲劇の作者の満足を
 感じた。しかし最後に感じたものはそれらの感情よりも遙かに大
 きい、何とも云われぬ気の毒さである。尊^{たつと}い人間の心の奥へ知ら
 ず識^しらず泥足^{どろあし}を踏み入れた、あやまるにもあやまれない気の毒
 さである。保吉はこの気の毒さの前に、一時間に亘^{わた}る葬式中、始
 めて悄^{しょうぜん}然と頭を下げた。本多少佐の親族諸君はこう云う英吉^{イギ}
 リス語の教師などの存在も知らなかったのに違いない。しかし保吉
 の心の中には道化^{どうけ}の服を着たラスコルニコフが一人、七八年たつ
 た今日^{こんにち}もぬかるみの往来^{ひざまず}へ跪いたまま、平^{ひら}に諸君の高免^{こうめん}を請

いたいと思つてゐるのである。……………

葬式のあつた日の暮れがたである。汽車を降りた保吉は海岸の下宿へ帰るため、篠垣しのがきばかり連つた避暑地の裏通りを通りかかつた。狭い往来は靴くつの底にしつとりと砂をしめらせてゐる。靄もやももういつか下り出おしたらしい。垣の中に簇むらつた松は疎まばらに空を透かせながら、かすかに脂やにの香かを放つてゐる。保吉は頭を垂れたまま、そう云う静かさにも頓とん着じやくせず、ぶらぶら海の方へ歩いて行つた。

彼は寺から帰る途中、藤田大佐と一しよになつた。すると大佐は彼の作つた弔辞の出来栄えを賞讃した上、「急きゆうえん焉ぎよくさい玉碎

す」と云う言葉はいかにも本多少佐の死にふさわしいなどと云う批評を下した。^{くだ}それだけでも親族の涙を見た保吉を弱らせるには十分である。そこへまた同じ汽車に乗った^{あいきようもの}愛敬者の田中中尉は保吉の小説を批評している読売新聞の月評を示した。月評を書いたのはまだその頃文名を馳せていたN氏である。N氏はさんざん罵倒した後、^{ばとう}こう保吉に止めを刺して^{とど}いた。——「海軍××学校教官の余技は全然文壇には不必要である」！

半時間もかからずに書いた弔辞は意外の感銘を与えている。が、幾晩も電燈の光りに推^{すい}敲^{こう}を重ねた小説はひそかに予期した感銘の十分の一も与えていない。勿論彼はN氏の言葉を一笑に付する余裕^{よゆう}を持っている。しかし現在の彼自身の位置は容易に^{いっしょう}一笑

に付することは出来ない。彼は弔辞には成功し、小説には見事に失敗した。これは彼自身の身になって見れば、心細い気のすることとは事実である。一体運命は彼のためにいつこう云う悲しい喜劇の幕を下して^{おろ}くれるであろう？……

保吉はふと空を見上げた。空には枝を張った松の中に全然光りのない月が一つ、赤銅色^{しゃくどういろ}にはつきりかかっている。彼はその月を眺めているうちに小便をしたい気がした。人通りは幸い一人もない。往来の左右は不相変^{あいかわらず}ひっそりした篠垣の列である。彼は右側の垣の下へ長ながと寂しい小便をした。

するとまだ小便をしているうちに、保吉の目の前の篠垣はぎいと後ろへ引きあげられた。垣だとはかり思っていたものは垣のよ

うに出来た木戸きどだったのであろう。そのまた木戸から出て来たのを見れば、口髭くちひげを蓄たくわえた男である。保吉は途方とほうに暮れたから、小便だけはしつづけたまま、出来るだけゆっくり横向きになった。「困りますなあ。」

男はぼんやりこう云った。何だか当惑そのものの人間になったような声をしている。保吉はこの声を耳にした時、急に小便も見えないほど日の暮れているのを発見した。

（大正十三年三月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文章

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>